

中国六朝古小説訳注『列異伝』(一)

先 坊 幸 子

『列異伝』訳注は、六朝古小説研究のための基礎資料収集とその読解を目的とし、現在続いている「中国六朝古小説訳注」作成の一部である。既に「晋・干宝『搜神記』」(白帝社 二〇〇四年)、「宋・陶潜『搜神後記』」(白帝社 二〇〇八年)、「斉・祖冲之『述異記』」(『中国古典文学研究』七)、「宋・東陽無疑『齊諧記』」(『中国中世文学研究』第五八号)、「梁・呉均『続齊諧記』」(『中国中世文学研究』第五九号)を発表し、引き続き「宋・劉義慶『幽明録』」、「宋・劉敬叔『異苑』」、「梁・任昉『述異記』」、更に仏教の影響の強い「宋・劉義慶『宣驗記』」、「斉・王琰『冥祥記』」等の訳注の作成を予定している。

魏・文帝『列異伝』は、六朝期に於ける志怪小説集の一つである。しかし現在では既に失われ、類書等に引用されている説話を残すのみとなっている。それらの説話は『列異伝』として鲁迅『古小説鉤沈』にまとめられている。『隋書』経籍志・雜伝に「列異伝三卷 魏文帝撰」とあるが、『旧唐書』経籍志・雜伝類および『新唐書』芸文志・小説家類は張華の撰とする。文中には文帝以降である「景初(二三七～二三九年)」、「正始(二四〇～二四九年)」、「甘露(二五六～二六〇年)」年間のことが記されており、後に増補されたものか、

或いは別の撰者の『列異伝』と混同されたものか、正確なところは分らない。

この度は『古小説鉤沈』を参考に、全四十七条の内「01 陳倉祠」から「07 欒侯」までの七条を取り上げ、類書所引『列異伝』を用いて字句の校勘をした上で訳注を施した。

01 陳倉祠

秦穆公時、陳倉人掘地得異物。其形不類狗、亦不似羊、衆莫能名。① 牽以獻穆公、道逢二童子。童子曰「此名為嫫、常在地下食死人腦。若欲殺之、以柏挿其頭。」嫫復曰「彼二童子、名為陳宝。得雄者王、得雌者霸。」陳倉人捨嫫逐二童子、童子化為雉、飛入平林。陳倉人告穆公。穆公發徒大獵、果得其雌。又化為石、置之汧渭之間。② 至文公、為立祠、名陳宝。雄飛南集。今南陽雉畎其地也。秦欲表其符。故以名畎。每陳倉祠時、有赤光長十余丈。從雉畎來、入陳宝祠中、有聲如雄鷄。③

秦の穆公の時、陳倉の人地を掘りて異物を得たり。其の形狗に類ず、亦た羊に似ず、衆能く名づくる莫し。牽きて以て穆公に獻ぜ

んとするに、道に二童子に逢ふ。童子曰く「此れ名を媼と為し、常に地下に在りて死人の脳を食ふ。若し之を殺さんと欲せば、柏を以て其の頭に挿せ」と。媼復た曰く「彼の二童子、名を陳宝と為す。雄を得る者は王となり、雌を得る者は覇となる」と。陳倉の人媼を捨てて二童子を逐ふに、童子化して雉と為り、飛びて平林に入る。陳倉の人穆公に告ぐ。穆公徒を発して大いに獵し、果たして其の雌を得たり。又た化して石と為れば、之を汧渭の間に置く。文公に至り、為に祠を立て、陳宝と名づく。雄飛びて南に集ふ。今南陽の雋県、其の地なり。秦其の符を表せんと欲す。故に以て県に名づく。陳倉祠る時毎に、赤光の長さ十余丈なる有り。雋県従り来り、陳宝の祠中に入り、声の雄鶏の如き有り。

【通釈】

秦の穆公の時、陳倉の人が地面を掘って不思議なものを手に入れた。その形は狗に似ておらず、また羊にも似ておらず、その名を知っている者はいなかった。連れて行って穆公に献上しようとしたところ、その途中で二人の子供に出くわした。子供が言うには「この名は媼といい、いつも地の下において死人の脳味噌を食べるのです。もしこれを殺したいと考えるなら、柏をその頭に挿しなさい」と。また媼が言うには「あの二人の子供は、名を陳宝といいます。雄を手に入れた者は王者となり、雌を手に入れた者は覇者となります」と。陳倉の人は媼を捨てて二人の子供を追いつけたが、子供は雉に化け、飛んで平林に入ってしまった。陳倉の人はこの事を穆公に告げた。穆公は兵を出して大掛かりな獵をし、果たして雌の方を手に入れた。更に石に化けたので、これを汧水と渭水の間に置いた。文公

の時、この石の為に祠を立て、陳宝と名づけた。雄の方は南へ飛んで行った。今の南陽の雋県がその地である。秦はその靈驗を世にあらわそうと考えた。それで県にこの名をつけたのである。陳倉の祭礼の都度、長さ十丈あまりの赤い光が差した。雋県から来て、陳宝の祠の中に入り、雄の鶏が鳴くような声が聞こえた。

【語釈】

*この話は『史記』卷二八・封禪書注（素隠）、『北堂書鈔』八九、『芸文類聚』九〇、『太平御覽』九一七に見える。また、この事は『搜神記』八（『史記』卷五・秦本紀注引）、『史記』卷五・秦本紀の注（正義）に引く『晋太康地志』、『漢書』卷二五上・郊祀志第五上、『宋書』卷二七・符瑞志上、任昉『述異記』下、『水経注』卷一七・渭水篇に見える。

①秦穆公―春秋、秦の主。徳公の第三子。名は任公、諡は穆。春秋五霸の一人。在位は三十九年（前六五九）前六二一年。（『史記』五）

②陳倉―県名。秦に置かれた。故城は陝西省宝鶏県の東。秦の文公が築いた。

③其形不類狗、亦不似羊、衆莫能名―この十三字、『芸文類聚』、『太平御覽』、『搜神記』、『宋書』は「若羊非羊、若猪非猪」（羊の若くして羊に非ず、猪の若くして猪に非ず）八字に、『史記』秦本紀の注は「若彘、不知名」（彘の若きも、名を知らず）五字に、任昉『述異記』は「若羊非羊、似猪非猪」八字に作る。

④媼―媼神。土地の神。この字、『史記』は「媼」に、任昉『述異記』は「媼」に作る。

⑤汧渭―汧水と渭水。汧水は、川の名。源は陝西省隴山の西北の汧山の南麓。古の龍魚川。渭水に注ぐ。渭水は、川の名。源は甘粛

省渭源県の西の鳥鼠山。黄河に注ぐ。渭河、渭川。

⑥文公―春秋、秦の主。襄公の子。諡は文。在位五十年(前七六五―前七一六年)。(『史記』五)

⑦南陽雒陽―南陽郡雒陽。河南省南召県の南。「雒」字、『宋書』は「穰」に作る。

⑧從雒陽來―「県」字、『北堂書鈔』は「城」に作る。

⑨有聲如雄鷄―「鷄」字、『北堂書鈔』、『芸文類聚』、『搜神記』は「雒」に作る。また、『搜神記』及び『宋書』はこの後に「其後、光武起於南陽」(其の後、光武 南陽に起こる)八字がある。

02 怒特祠

武都故道県有怒特祠、云神本南山大梓也。昔秦文公二十七年、伐之、樹瘡隨合。秦文公乃遣四十人持斧斫之、猶不斷。疲士一人、傷足不能去、臥樹下。聞鬼相与言、曰「勞攻戰乎。」其一日「足為勞矣。」又曰「秦公必持不休。」荅曰「其如何。」又曰「赤灰跋於子何如。」乃默無言。臥者以告。令士皆赤衣、隨所斫以灰跋樹。断化為牛入水。故秦為立祠。

武都故道県に怒特祠有り、神は本 南山の大梓なりと云ふ。昔 秦の文公の二十七年、之を伐るに、樹瘡 随ひて合す。秦の文公 乃ち四十人を遣はして斧を持して之を斫らしむるに、猶は断たれず。疲れし士一人あり、足を傷つけて去く能はず、樹下に臥す。鬼の相ひ与に言ふを聞くに、曰く「攻戦に勞るや」と。其の一曰く「勞ると為すに足らんや」と。又た曰く「秦公 必ず持して休めざらん」

と。荅へて曰く「其れ我を如何せん」と。又た曰く「赤と灰もて子を踏さば何如せん」と。乃ち黙して言無し。臥す者 以て告ぐ。士をして皆な赤衣せしめ、斫る所に随ひて灰を以てし樹を跋す。断ちて化して牛と為りて水に入る。故に秦 為に祠を立てた。

【通釈】

武都郡故道県に怒特祠があり、その御神体は元々南山の大きな梓の樹だという。むかし秦の文公の二十七年、これを伐ったところ、樹の瘡は伐るにしたがつて塞がつてしまった。そこで秦の文公は四十人を遣わして斧でこの樹を斫らせたが、それでも切り倒すことは出来なかった。一人の疲れた兵士がおり、足を傷つけて歩くことが出来ず、樹の下で横になっていた。幽鬼が仲間と語っているのが聞こえて、言うには「戦って疲れたか」と。その片方が言うには「どうして疲れるに足ろうか」と。また言うには「秦公は必ずこのまま止めることはないだろう」と。荅えて言うには「彼は私をどうすることも出来ない」と。また言った「赤と灰を使ってお前を倒そうとしたらどうするのだ」と。そこで黙ったまま何も言わなくなった。横になっていた者はこの事を語った。兵士すべてに赤衣着物を着せ、切り口にすぐに灰をすり込んで樹を倒した。樹は切られると牛に化けて水の中に逃げ込んだ。そこで秦はこの樹の為に祠を立てた。

【語釈】

*この話は『水経注』巻一七・渭水篇、『後漢書』光武紀注、『北堂書鈔』一三〇、『芸文類聚』九四に見える。また、この事は『搜神記』一八、『後漢書』郡国志五注に引く『搜神記』、『太平御覧』九〇〇に引く『搜神記』、『事類賦』注二二に引く『搜神記』、『史記』巻五・秦本紀注(集解)、『史記』巻五・秦本紀注(正義)に引く『録異伝』、『初学記』八に引く『録異

伝、『太平實字記』三十に引く『録異伝』、『太平御覽』四四に引く『録異伝』、『北堂書鈔』一三〇に引く『玄中記』、『太平御覽』六八〇に引く『玄中記』、『太平御覽』三四一に引く『列仙伝』に見える。

秦文公時、梓樹化為牛、以騎擊之、騎不勝。或墮地、髻解被髮。牛畏之入水。故秦因是置旄頭騎、使先驅。〔後漢書〕光武紀注

秦の文公の時、梓樹化して牛となり、騎を以て之を撃たんとするも、騎勝たず。或いは地に墮ち、髻解けて被髮す。牛之を畏れて水に入る。故に秦は是れに因りて旄頭騎を置き、先驅せしむ。

秦時、武都故道有怒特祠。祠上生梓樹。秦文公二十七年、使人伐之、輒有大風雨。樹創隨合、經日不斷。文公乃益發卒、持斧者至四十人、猶不斷。士疲還息。其一人傷足、不能行。臥樹下。聞鬼語樹神、曰「勞乎攻戰。」其一人曰「何足為勞。」又曰「秦公將必不休、如之何。」答曰「秦公其如予何。」又曰「秦若使三百人被髮以朱絲繞樹、赭衣灰塗伐汝、汝得不困耶。」神寂無言。

明日、病人語所聞。公於是令人皆衣赭、隨斫創、塗以灰。樹斷、中有一青牛出、走入豐水中。其後、青牛出豐水中。使騎擊之不勝。有騎、墮地復上、髻解被髮。牛畏之、乃入水不敢出。故秦自是置旄頭騎。〔搜神記〕一八

秦の時、武都の故道に怒特祠有り。祠上に梓樹を生ず。秦の文公の二十七年、人をして之を伐らしむるや、輒ち大風雨有り。樹の創隨ひて合し、日を経るも断たれず。文公乃ち益す卒を發し、斧を持する者四十人に至るも、猶ほ断たれず。士は疲れ還りて息ふ。其の一人足を傷つけ、行くこと能はず。樹下に臥す。鬼の樹神に語るを聞くに、曰く「攻戰に勞るるや」と。其の一人曰く「何ぞ勞ると為すに足らん」と。又た曰く「秦公將に必ず休めざらん、之を如何せん」と。答へて曰く「秦公其れ予を如何せん」と。又た曰く「秦若し三百人をして髪を被り朱絲を以て樹に繞らし、赭衣灰塗して汝を伐らしむれば、汝困しまざるを得んや」と。神寂として言無し。明日、病む人聞く所を語る。公是に於て人をして皆な赭を衣せ、

斫創に隨ひ、塗るに灰を以てせしむ。樹断たれ、中より一青牛の出づる有り、走りて豐水中に入る。其の後、青牛豐水中より出づ。騎をして之を撃たしむるも勝たず。騎有り、地に墮ちて復た上り、髻解けて髪を被る。牛之を畏れ、乃ち水に入りて敢へて出でず。故に秦は是れ自り旄頭騎を置く。

- ① 武都故道県―地名。武都郡故道県。今の甘肅省成県の西。
- ② 怒特祠―祠の名。秦の文公が南山の大梓を伐った時に樹中から出た青牛を祀る。

- ③ 云神本南山大梓也―この八字、『搜神記』は「祠上生梓樹」（祠上に梓樹を生ず）に、『太平御覽』九〇〇は「土生梓樹」（土に梓樹を生ず）に、『事類賦』は「上生梓樹」（上に梓樹を生ず）に、『史記』集解は「図大牛、上生樹木」（大牛を図き、上に樹木を生ず）に、『史記』正義および『太平御覽』四四は「雍南山有大梓樹」（雍南山に大梓樹有り）に、『初學記』は「雍州南山文梓樹」（雍州南山の文梓樹）に、『太平實字記』は「雍南山有梓樹」（雍南山に梓樹有り）に、『太平御覽』六八〇は「終南公有梓樹、大数百間、蔭宮中」（終南公に梓樹有り、大さき数百間にして、宮中を蔭す）に作る。

- ④ 秦文公―春秋、秦の襄公の子。諡は文。在位五十年（前七六五―前七二六年）。〔史記〕五 この三字、『太平御覽』六八〇は「秦始皇」に作る。

- ⑤ 伐之―この二字の後、『搜神記』、『史記』正義、『太平實字記』、『太平御覽』四四は「輒有大風雨」（輒ち大風雨有り）五字、『太平御覽』六八〇は「天輒大風雨、飛沙石、人皆疾走、夜至」（天

輒^{すは}ち大風雨あり、沙石を飛ばし、人^{みな}皆な疾走し、夜に至る) 十
四字あり。

⑥疲士一人、臥者以告——この六十字、『後漢書』光武紀注、『北堂書
鈔』に引く『列異伝』及び『玄中記』、『芸文類聚』、『後漢書』郡
国志五、『史記』集解、『初学記』、『太平御覽』三四一に無し。

⑦赤灰——この二字、『搜神記』は「以朱絲繞樹、赭衣灰塗」(朱絲を
以て樹に繞らし、赭衣灰塗す) 九字に、『太平御覽』九〇〇、『事
類賦』は「赭衣灰塗」四字に、『史記』正義、『太平實字記』は「以
朱絲繞樹」(朱絲を以て樹に繞らす) 五字に、『太平御覽』四四四
は「以朱絲繞伐樹」(朱絲を以て繞らせ樹を伐る) 六字に、『太平御
覽』六八〇は「以赤絲繞樹」(赤絲を以て樹に繞らす) に作る。

⑧跋——この字、『搜神記』、『史記』正義、『太平實字記』、『太平御覽』
六八〇は「伐」に作る。

⑨牛入水——「牛」字、『搜神記』、『事類賦』、『史記』正義、『初学記』、
『太平實字記』、『太平御覽』四四、『北堂書鈔』に引く『玄中記』、
『太平御覽』六八〇は「青牛」に作る。「水」字、『芸文類聚』、『搜
神記』、『史記』正義、『太平實字記』は「豊水」に、『初学記』、『太
平御覽』四四、『玄中記』は「豊水」に、『北堂書鈔』に引く『玄
中記』及び『太平御覽』三四一は「河」に作る。

⑩故秦為立祠——『搜神記』、『太平御覽』九〇〇、『事類賦』、『北堂書
鈔』に引く『玄中記』、『初学記』、『太平實字記』、『太平御覽』四
四、『太平御覽』六八〇にはこの句が無く、『搜神記』、『太平御覽』
九〇〇、『事類賦』、『太平實字記』、『太平御覽』四四および六八〇
には「旄頭騎」が置かれたという記述がある。「旄頭騎」は、先

驅の騎士。「旄」字、『北堂書鈔』一三〇は「髦」に作る。

03 干将莫邪

①干将莫邪為楚王作劍、三年而成。劍有雄雌、天下名器也。乃以雌
劍獻君、藏其雄者。謂其妻曰「吾藏劍在南山之陰、北山之陽。松
生石上、劍在其中矣。君若覺殺我。爾生男、以告之。」及至君覺、
殺干将。

妻後生男、名赤鼻、告之。赤鼻斫南山之松、不得劍。忽於屋柱中
得之。楚王夢一人、眉広三寸、辞欲報讐。購求甚急。乃逃朱興山
中、遇客。欲為之報。乃刎首、將以奉楚王。客令鑊煮之、頭三日
三夜跳不爛。王往觀之、客以雄劍倚擬王、王頭墮鑊中。客又自
刎。三頭悉爛、不可分別。分葬之、名曰「三王家」。

干将莫邪 楚王の為に劍を作り、三年にして成る。劍に雄雌有り、
天下の名器なり。乃ち雌劍を以て君に獻ぜんとし、其の雄なる者を
藏す。其の妻に謂ひて曰く「吾劍を藏して南山の陰、北山の陽に在
らしむ。松石上に生じ、劍其の中に在るなり。君若し覺らば我を
殺さん。爾男を生まば、以て之に告げよ」と。至るに及びて君覺
り、干将を殺す。

妻後に男を生み、赤鼻と名づけ、之に告ぐ。赤鼻 南山の松を斫
に、劍を得ず。忽ち屋柱の中に於て之を得たり。楚王 一人を夢む
るに、眉の広さ三寸、辞して「讐に報いんと欲す」と。購ひ求む
ること甚だ急なり。乃ち朱興山中に逃れ、客に遇ふ。之が為に報
いんと欲す。乃ち首を刎ね、將に以て楚王に奉ぜんとす。客 鑊を

して之を煮令むるも、頭三日三夜跳ねて爛れず。王往きて之を觀るに、客雄劍を以て倚りて王に擬すれば、王の頭鑊中に墮つ。客又た自刎す。三頭悉く爛れ、分別する可からず。分ちて之を葬り、名づけて曰く「三王冢」と。

【通釈】

干将莫邪は楚王の為に劍を作り、三年かかつて出来上がった。劍には雄と雌とがあり、天下の名器であつた。そこで雌劍を王に献上することにし、その雄の方を隠してしまつた。自分の妻に向かつて言うには「私は劍を南山の北、北山の南に隠しておいた。松が石の上に生え、その中に劍がある。王がもしこの事に気づいたら私を殺すだろう。お前が男の子を産んだなら、それにこの事を話さない」と。献上に行くとき王はこの事に気がついて、干将を殺してしまつた。その妻は後に息子を産み、赤鼻と名づけ、これに事の次第を話して聞かせた。赤鼻が南山の松を斫つたところ、劍は見つからなかつた。にわかにかの家の柱の中にこの劍を見つけた。楚王が一人の男を夢に見たが、眉間の広さが三寸あり、「讐に報いたい」と言つた。王は賞金をかけて厳しく搜索した。そこで朱興山の中に逃れ、客に出会つた。客はこの息子の為に王に報いようとした。そこで息子の首を刎ね、それを持って行つて楚王に奉ぜんとした。客は鑊でこれを煮させたが、この頭は三日三夜のあいだ跳ねて爛れなかつた。王が様子を見に行つてこれを覗き込んだところを、客が近寄り王の首に雄劍を当てると、王の頭は鑊の中に落ちた。客も自らの首を刎ねた。三つの頭は全て爛れ、見分けることが出来なかつた。等分してこれらを葬り、その墓は「三王冢」と名づけられた。

【語釈】

*この話は「太平御覽」三四三注に見える。また、この事は「搜神記」一一、「法苑珠林」三六に引く「搜神記」、「太平御覽」三四三注に引く「搜神記」、「太平御覽」三四三および三六四に引く「吳越春秋」、「太平御覽」三四三に引く「列士伝」、「太平御覽」三四三に引く「孝子伝」に見える。

楚干将莫邪為楚王作劍、三年乃成。王怒、欲殺之。劍有雌雄。其妻重身当産。夫語妻曰「吾為王作劍、三年乃成。王怒、往必殺我。汝若生子是男、大、告之曰『出戸望南山、松生石上、劍在其背。』」於是即將雌劍、往見楚王。王大怒、使相之「劍有二、一雄一雌。雌来、雄不来。」王怒、即殺之。

莫邪子名赤、比後壯、乃問其母曰「吾父所在。」母曰「汝父為楚王作劍、三年乃成。王怒、殺之。去時囑我「語汝子。出戸望南山、松生石上、劍在其背。」」於是子出戸南望、不見有山、但觀堂前松柱下石砥之上。即以斧破其背、得劍。日夜思欲報楚王。

王夢見一兒、眉間広尺。言「欲報讐。」王即購之千金。兒聞之亡去。入山行歌、客有逢者、謂「子年少、何哭之甚悲耶。」曰「吾干将莫邪子也。楚王殺吾父。吾欲報之。」客曰「聞王購子頭千金。將子頭与劍来。為子報之。」兒曰「幸甚。」即自刎、両手捧頭及劍奉之、立僵。客曰「不負子也。」於是屍乃仆。

客持頭往見楚王。王大喜。客曰「此乃勇士頭也。当於湯鑊煮之。」王如其言。煮頭三日三夕、不爛。頭踴出湯中、瞋目大怒。客曰「此兒頭不爛。願王自往臨視之。是必爛也。」王即臨之。客以劍擬王、王頭隨墮湯中。客亦自擬己頭、頭復墮湯中。三首俱爛、不可識別。乃分其湯肉葬之。故通名「三王墓」。今在汝南北宜春界。（「搜神記」一一）

楚の干将莫邪は楚王の為に劍を作り、三年にして乃ち成る。王怒り、之を殺さんと欲す。劍に雌雄有り。其の妻重くして当に産むべし。夫妻に語りて曰く「吾王の為に劍を作り、三年にして乃ち成る。王怒り、往けば必ず我を殺さん。汝若し子を生みて是れ男なら

ば、大となりしとき、之に告げて曰へ「戸を出でて南山を望めば、松石上に生じ、劍は其の背に在り」と。是に於て即ち雌劍を將ち、往きて楚王に見ゆ。王大いに怒り、之を相せ使むるに「劍に二有り、一は雄一は雌なり。雌來りて、雄來らず」と。王怒り、即ち之を殺す。

莫邪の子名は赤、後に壯となるに比び、乃ち其の母に問ひて曰く「吾が父の所在は」と。母曰く「汝が父楚王の為に劍を作り、三年にして乃ち成る。王怒り、之を殺す。去きし時我に囑す「汝の子に語れ。戸を出でて南山を望めば、松石上に生じ、劍其の背に在り」と。是に於て子は戸を出でて南に望むも、山有るを見ず、但だ堂前の松柱石碁の上に下るを觀るのみ。即ち斧を以て其の背を破り、劍を得たり。日夜思ひて楚王に報いんと欲す。

王夢に一兒を見るに、眉間の広さ尺なり。言ふ「讎に報いんと欲す」と。王即ち之を千金に購ふ。兒之を聞きて亡げ去る。山に入りて行歌するに、客の逢ふ者有り、謂ふ「子は年少きに、何ぞ哭することの甚だ悲しき耶」と。曰く「吾は干将莫邪の子なり。楚王吾が父を殺す。吾之に報いんと欲す」と。客曰く「王子の頭を千金に購ふと聞く。子の頭と劍とを將ちて來れ。子の為に之に報いん」と。兒曰く「幸甚なり」と。即ち自刎し、両手に頭及び劍を捧げて之に奉じ、立ち僵る。客曰く「子に負かざるなり」と。是に於て屍乃ち作る。

客頭を持ちて往きて楚王に見ゆ。王大いに喜び。客曰く「此れ乃ち勇士の頭なり。當に湯鑊に於て之を煮るべし」と。王其の言の如くす。頭を煮ること三日三夕なるも、爛れず。頭湯中より躍出し、躡目して大いに怒る。客曰く「此の兒の頭爛れず。願はくは王自ら往きて臨みて之を視よ。是れ必ず爛れん」と。王は即ち之に臨む。客劍を以て王に擬すれば、王の頭隨ひて湯中に墮つ。客も亦た自ら己が頭に擬し、頭復た湯中に墮つ。三首俱に爛れ、識別す可からず。乃ち其の湯肉を分ちて之を葬る。故に通じて「三王墓」

と名づく。今汝南の北宜春県の界に在り。

①干将莫邪―古の二つの名劍の名。干将は呉（一説に楚、又、一説に韓）の刀匠の名で、莫邪はその妻の名。呉王闔閭の為に協力して陰陽二劍を造り、陽の劍を干将、陰の劍を莫邪という。『搜神記』、『法苑珠林』は「楚干将莫邪」五字に作り、『太平御覽』三四三に引く『吳越春秋』は「干将者呉人」五字に作る。

②為楚王作劍―「楚王」二字、『太平御覽』三四三に引く『吳越春秋』は「闔閭」に、『太平御覽』三四三に引く『列士伝』は「晋君」に、『太平御覽』三四三に引く『孝子伝』は「晋王」に作る。

③名赤鼻―この句、『搜神記』、『法苑珠林』は「名赤」二字に、『太平御覽』三四四に引く『吳越春秋』は「眉間尺」三字に、『太平御覽』三四三に引く『孝子伝』は「眉間赤名赤鼻」六字に作る。

④乃逃朱興山中―この六字、『搜神記』、『法苑珠林』は「兒聞之、亡去、入山行歌」（兒之を聞きて亡げ去り、山に入る）九字に作る。

⑤三日三夜―この四字、『太平御覽』三四四に引く『吳越春秋』は「七日七夜」に、『太平御覽』三四三に引く『列士伝』は「三日」に作る。

⑥三王家―『搜神記』、『法苑珠林』はこの後に「今在汝南北宜春県界」（今汝南の北宜春県の界に在り）九字がある。「汝南北宜春県」について、『太平御覽』三四四に引く『吳越春秋』は「汝南宜春県」とする。『漢書』卷二八・地理志第八上には「北」字が無く、『後漢書』卷三〇・郡国志二には「北宜春」と記す。当時、豫章郡にも宜春県（漢に置かれた。江西省吉安県の西北）が置かれていた。汝南郡宜春県は今の河南省汝南県。『漢書』卷二八・

地理志第八上)

04 無忌

魏公子無忌^①、曾在室中読書之際、有一鳩飛入案下、鳩逐而殺之。忌忿其搏擊^②、因令国内捕鳩、遂得二百余頭。忌按劍至籠曰「昨擲鳩者当低頭服罪、不是者可奮翼。」有一鳩、俯伏不動。

魏の公子無忌^{むき}、曾て室中に在りて読書するの際、一鳩有りて飛びて案下に入るも、鳩逐ひて之を殺す。忌其の搏撃するを忿り、因りて国内に令して鳩を捕へしめ、遂に二百余頭を得たり。忌劍を按じて籠に至りて曰く「昨鳩を擲せし者当に低頭して罪に服すべし。是れならざる者は奮翼す可し」と。一鳩有り、俯伏して動かず。

【通釈】

魏の公子の無忌は、かつて部屋の中で読書していた時、一羽の鳩が飛んできて机の下に入ったが、鳩が追い掛けてきて鳩を殺してしまった。忌は鳩が鳩を撃ち殺したことを忿り、そこで国中に命じて鳩を捕らえさせ、その結果二百頭余りの鳩を捕まえた。忌は劍の柄に手を掛けて籠に近寄ってこう言った「昨日鳩を殺した者は頭を低れて罪に服せ。そうでない者は翼を奮わせよ」と。すると頭を下げて動かないものが一羽いた。

【語釈】

*この話は『太平広記』四六〇に見える。

①魏公子無忌―生年未詳―前二四四年。戦国・魏の昭王の少子で、魏の安釐王の異母弟。諱は無忌。昭王が薨じ、安釐王が即位する

と、信陵君に封ぜられた。戦国四君の一人。秦に圧迫を受けた魏を支え、諸国をまとめて秦を攻めるも、安釐王に疑われ、過度の飲酒の為に亡くなった。(『史記』七七)

②搏撃―この二字、明鈔本『太平広記』は「驚戾」(粗暴で道理にもとる意)に作る。

③擲鳩者―「擲」字、明鈔本『太平広記』は「殺」に作る。

05 魯少千

魯少千者、得仙人符。楚王少女為魅所病、請少千。少千未至数十里止宿。夜有乘鼃蓋車、從数千騎來。自称伯敬、候少千。遂請内酒数榼、肴饌数案。臨別言「楚王女病、是吾所為。君若相為一還、我謝君二十万。」千受錢、即為還。從他道詣楚、為治之。於女舍前、有排戸者、但聞云「少千欺汝翁。」遂有風声西北去、視処有血满盆。女遂絶氣、夜半乃蘇。王使人尋風、於城西北得一死蛇。長数丈、小蛇千百、伏死其旁。後詔下郡県、以其日月、大司農失錢二十万、太官失案数具。少千載錢上書、具陳説、天子異之。

魯少千は、仙人の符を得たり。楚王の少女、魅の病ましむる所と為り、少千に請ふ。少千未だ至らざること数十里にして止宿す。夜随蓋の車に乗り、数千騎を從へて来る有り。自ら伯敬と称し、少千を候ふ。遂に内酒数榼、肴饌数案を請ふ。別れに臨みて言ふ「楚王の女、病むは、是れ吾の為す所なり。君若し相ひ為に一たび還らば、我君に二十万を謝す」と。千錢を受け、即ち為に還る。他道従り楚に詣り、為に之を治す。女の舍前に於て、戸を排せん

とする者有り、但だ「少千、汝翁を欺く」と云ふを聞く。遂に風声有りて西北に去り、処に血の盆に満つる有るを視る。女、遂に氣を絶し、夜半、乃ち蘇る。王人をして風を尋ね使むるに、城の西北に於て一死蛇を得たり。長さ数丈あり、小蛇千百、伏して其の旁に死す。後に、詔して郡県に下すに、其の日月を以て、大司農、錢二十万を失ひ、太官、案数具を失ふ。少千、錢を載せて上書し、具に陳説するに、天子之を異とす。

【通釈】

魯少千は、仙人のおふだを手に入れた。楚王の末の娘が妖怪によつて病氣にさせられ、少千に治療を依頼した。少千はその地から数十里離れたところで宿を取った。夜にすっぱんの甲羅の覆いのある車に乗り、数千騎を従えてやつて来る者がいた。自ら伯敬と名乗り、少千に挨拶した。そのまま数個の酒樽に入った内酒と、数脚の机に載った酒肴を持って来させた。別れに臨んで言うには「楚王の娘が病氣になったのは、私がやったことだ。もしあなたが私の為に引き返してくれるならば、私はあなたに二十万のお礼をする」と。千は錢を受け取り、直ぐに引き返した。他の道から楚に行つて、娘の病を治した。娘のいる建物の前で、扉を退けようとする者がいたが、ただ「少千は俺様を欺いた」と言うのが聞こえるだけだった。そのまま風の音が聞こえて西北の方へ去り、処々に盆に満ちるほどの血が溜まっているのを見た。娘はそのまま氣絶し、夜半になつて蘇った。王が使いを出して風の方向を捜させたところ、城の西北で一匹の死んでいる蛇を見つけた。長さは数丈もあり、小さい蛇が千百ほど、その側で伏して死んでいた。後に郡・県に詔を出して調べ

ると、その月のその日に、大司農が二十万の錢を失ひ、太官の數案の御馳走が無くなつていた。少千は錢を添えて上書し、詳しく説明すると、楚王はこれを不思議な事とした。

【語釈】

*この話は『太平広記』四五六に見える。

① 楚王少女——『太平広記』はこの後に「英」字あり。

② 内酒——宮中の酒。

③ 汝翁——老人が子や目下の者に対し、自分をさしていう。

④ 大司農——漢代、穀貨を掌る長官。大農令。

⑤ 太官——官名。秦に置かれた。少府の属。宮中の膳羞を掌る。

06 公孫達

① 任城公孫達、甘露中為陳郡。卒官、將斂、兄及郡吏數十人臨喪。② 達有五歲兒、忽作靈語、音声如父。呵衆人「哭泣。吾欲有所道。」因呼諸兒、以次教戒。兒悲哀不能自勝。乃慰之曰「四時之運、猶有所終。」③ 人物短脆、當無窮。」如此數千語、皆成文章。兒乃問曰「人死皆無知、惟大人聰明殊特。独有神耶。」答曰「存亡之事、未易可言。鬼神之事、非人知也。」索紙作言、辭義滿紙。投地云「封書与魏君宰。莫有信来、即以付之。」其莫、君宰果有信来。

任城の公孫達、甘露中に陳郡と為る。官に卒し、將に斂せんとし、兄及び郡吏數十人喪に臨む。達に五歳の兄有り、忽ち靈語をなすに、音声、父の如し。衆人を呵す「哭止めよ。吾道ふ所有らんと欲す」と。因りて諸兒を呼び、次を以て教戒す。兒悲哀して自

ら勝ふ能はず。乃ち之を慰めて曰く「四時の運すら、猶は終る所有り。人・物短脆なるも、当に窮まること無かるべし」と。此くの如きこと数千語、皆な文章を成す。兎乃ち問ひて曰く「人死すれば皆な知無きに、惟だ大人のみ聡明なること殊特なり。独り神有るや」と、答へて曰く「存亡の事、未だ言ふ可きに易からず。鬼神の事、人の知るに非ざるなり」と。紙を索めて言を作すに、辞義紙に満つ。地に投じて云ふ「書を封じて魏君宰に与へよ。莫に信の来る有れば、即ち以て之を付せ」と。其の莫、君宰より果たして信の来る有り。

【通釈】

任城の公孫達は、甘露年間に陳郡太守になった。官に就いたままで亡くなり、納棺しようとする時、その息子や郡の役人達が数十人ほど喪に臨んだ。達には五歳の息子がおり、俄に霊が乗り移って言葉を発したが、その声は父と同じであった。集まった人々を叱って言うには「哭するのを止めなさい。私は言いたいことがあるのだ」と。そこで息子たちを呼び、年の順に教え戒めた。息子たちは悲しみに堪えることが出来なかった。そこで彼らを慰めて言うには「四季の運りさえ、なお終わりがある。人や物は儚く脆いが、滅びることとは無いのだ」と。こうして数千語を告げたが、みな文章を成していた。息子が尋ねて言うには「人間は死んでしまえばみな知覚が無いというのに、ただ父上だけは特別聡明です。父上だけ心が残っているのですか」と、答えて言うには「生死のことは、いまだ簡単に言うことは出来ない。鬼神の事は、人に理解できるものではない」と。紙を用意させて文を記すに、言葉が紙いっぱい記されていた。それを地に投げて言うには「書を封じて魏君宰に送りなさい。暮れ

に使者が来る筈だから、すぐにこれを渡すように」と。その暮れに、果たして君宰からの使者が来た。

【語釈】

*この話は『太平御覧』八八四、『太平広記』三二六に見える。

- ①任城―県名。漢に置かれた。今の山東省済寧県。
- ②甘露―前漢の宣帝劉詢の年号（前五二―前四九）。
- ③陳郡―郡名。南朝宋に置かれた。治は陳県。河南省淮陽県の治。
- ④達有五歳児―因呼―この二十五字、四庫全書『太平御覧』は「公達止」三字に作る。「吾欲有所道」五字、『太平広記』に無し。
- ⑤人物短脆、当無窮―この七字、『太平広記』は「人脩短殊、誰不致此」（人は脩短殊なるも、誰か此を致さざらん）に作る。
- ⑥皆成文章―「成」字、『太平広記』は「合」に作る。
- ⑦存亡之事、未易可言―この八字、『太平広記』に無し。
- ⑧投地云、封書与魏君宰、莫有信来、即以付之、其莫、君宰果有信来―この二十五字、『太平広記』は「投地遂絶」（地に投じて遂に絶ゆ）四字に作る。

07 爨侯

漢中有鬼神爨侯、常在承塵上。喜食鮮菜、能知吉凶。甘露中、大蝗起、所経処禾稼輒尽。太守遣使告爨侯、祀以鮮菜。侯謂吏曰「蝗虫小事。輒当除之。」言訖、翕然飛出。吏髣髴、其状類鳩、声如水鳥。吏還、具白太守。果有衆鳥億万、来食蝗虫、須臾皆尽。

漢中に鬼神爨侯有り、常に承塵の上に在り。鮮菜を食ふを喜び、

能く吉凶を知る。甘露中、大いに蝗起こり、経る所の処禾稼は
 輒ち尽く。太守使をして欒侯に告げ遣め、祀るに鮮菜を以てす。
 侯吏に謂ひて曰く「蝗虫は小事なり。輒ち当に之を除くべし」
 と。言ひ訖るや、翕然として飛び出づ。吏髣髴たるも、其の状は
 鳩に類て、声は水鳥の如し。吏還り、具に太守に白す。果たして
 衆鳥億万有り、来りて蝗虫を食ふに、須臾にして皆な尽く。

【通釈】

漢中に欒侯という鬼神がおり、常に承塵の上にいた。鮮菜を食べ
 るのが好きで、吉凶のことを知っていた。甘露年間、蝗が大発生
 し、それらが通ったところの稲はみな食べ尽くされた。太守は使を
 立てて欒侯に告げさせ、鮮菜を供えて祀った。侯は役人にこう言っ
 た「蝗ごとき大したことではない。すぐに除いてやろう」と。言
 い終わると、さっと飛び出していった。役人にはほんやりとしか見
 えなかったが、その姿は鳩に似ていて、声は水鳥のようだった。役
 人は戻って、太守に詳しく報告した。果たして億万もの鳥があらわ
 れ、やって来て蝗を食べ、すぐに食べ尽くした。

【語釈】

*この話は『北堂書鈔』一四六、『太平広記』二九二に見える。

漢川神常在承塵上、喜食鮮菜。(『北堂書鈔』一四六)

漢川の神 常に承塵の上に在り、鮮菜を食ふを喜む。

①漢中―陝西省南西部。

②承塵―屋根裏から落ちる塵などを防ぐ為、部屋の上方に板・布・
 筵等を張ったもの。

③鮮―酢漬けの魚。

④甘露―前漢の宣帝劉詢の年号(前五二―前四九)。

⑤禾稼―穀物。穀類。

⑥翕然―多くのものが一つに集まり合う様子。

〔二〇一一・九・二九 受理〕